

エッセイ

## たかが川柳されど川柳（六）

上野 一彦

### 葉桜の季節に猫を想う

エイジングのせいか本も人のこころも読みにくくなってきた。晩年白内障で悩み、薄れゆく視力のなかで必死に睡蓮を描き続けたクロード・モネではないが、見えなくなっただろうという不安が脳裏を過ることも少なくなない。そんな日々のなか、相変わらずゴキブリのように本を読み漁っている。いずれ視力が薄れ、文字が追えなくなった日、カミさんに本を読んでもらう、そんな幼子が母から読み聞かせてもらおうがごとき極楽浄土のような妄想もないわけだ

はないが。

センター試験などで、視覚に障害のある人への配慮として「読み手」をつけても、速い、遅い、元に戻ってと注文も多く、その支援関係にも結構緊張が伴うそうだ。老人問題も含め、障害に対する配慮に、成熟していないわが国では読み手を探すのも苦労すると聞く。わが身に当てはめたと、今、本を読まないでいつ読むのかか。自身で読むなら今のうちという焦りを感じる今日この頃である。

ところで本の入手に「アマゾン」は便利だが、検索事項を記入する安直さが、便利さの反面、本を探す面白みを失

わせる。北鎌倉に設定されたビブリオ古書堂ではないが、古本屋で菓子さんに巡り合わないまでも店主の好みを思いつつ、ゆっくり棚の端から眺め、手に取りお宝との邂逅を夢見るのも悪くない。そういうえば、本郷三丁目の「かねやす」の裏路地にあった古本屋が店を仕舞った。これぞまた、私の生息区域がひとつ狭まった。

### 「行きつけの本屋が今日で店仕舞」

最近、駅なかに増えた本屋で、アニメコーナーを避けながら、本屋大賞など、本好きマニアの人気動向を知るのも楽しい。猫好きの私に手を取った、川村元氣『世界から猫が消えたら』（小学館文庫）は、小編ながら、携帯電話やスマホに埋没している現代の風潮を鋭く切り取っており面白かった。川村氏はわが末子の憧れの人で、映画会社に就職後、社内企画募集に応募したことを契機に転身、今やわが国を代表する映画プロデューサーにして絵本作家である彼の最初の小説である。もっともこの話、読書後に本書を家内に薦めたら、「あら川村さんて・・・」と初めて息子の上司に連なる関わりを知った。サラリーマンをしながら、やりたい仕事をする才人。差し詰め現代のスーパーマンである。同じ本を数冊買い求め、やはり猫好きの友人にも配ったが、今のところ反応はニヤイ。

東川篤哉の『完全犯罪に猫は何匹必要か』（光文社文庫）は三毛猫に招き猫まで登場する心理学的錯誤を探りこんだ本格推理・ユーモア小説であるが、猫が何匹、何体登場するか数えるだけでも煩わしい。招き猫の二大産地、招くのは左手か、右手かなど、まあ猫に関する周辺情報にも詳しくなるといふ意味で勉強にはなった。

買いやすく持ちやすい文庫本中心の私には勇気のいる豪華本ではあったが、タムシン・ピッケラル(著)、アストリッド・ハリソン(写真)の『世界で一番美しい猫の図鑑』（エクスマレッジ）はややバタ臭いが、まるでオーデュボンの重厚な図鑑のようにつしりとうれしさのこみ上げる本だった。しかし、同じ写真集なら、浅田次郎の『民子』（角川書店）のほうが、金のかからぬ和製の映画の趣があり、ずっと身近で庶民的である。民子とは、それこそ名作伊藤左千夫の『野菊の墓』のヒロインと同じ名前ではないか。政夫と二歳年上の従姉の民子の純愛小説。もっとも、この民子はいつの間にか浅田家に居ついた野良猫の「民子」ではあったが。ストーリーテラーらしい浅田次郎の「民子が忘れられない」というキャプションに思わず引き込まれていく。漱石の『吾輩は猫である』もそうであるが、先生に猫はお似合いである。

世の中には猫派と犬派がいるそうだが、ややわがままで神秘性のある猫に強く惹かれる。それはまさに思いどおりにならぬ女性に恋い焦がれる哀れな男の性がそうさせるのだろうか。放っておけばいつの間にかすり寄ってくるそんな計算できぬところが何とも愛おしい。

話は変わるが、ある日、駒込の駅なかの店に平積みされていた一冊の本を手にとった。タイトルが『**葉桜の季節に君を想うということ**』(文春文庫)、作者は歌野晶午。第五七回日本推理作家協会賞、第四回本格ミステリー大賞、「二〇〇四年版このミステリーがすごい！」第一位というバリバリのミステリー作品である。それにしてもなんと美しいタイトルではないか。

全一三章三一節、第一章一節「出会い」。書き出しのパラグラフで私はひっくり返った。

「射精したあととは動きたくない。相手の体に覆いかぶさったまま、押し寄せてくる眠気を素直に受け入れたい。」

エロ小説を買ったつもりはない。タイトルの美しさ思わず買いためたそそっかさを呪いつつも読み進むうちに、だんだん引き込まれていった。それは小説の舞台が、自分が育ち、また今住んでいる、耳に懐かしい地名がやたらと

出てくるせいでもあった。

現在の住いの最寄駅、JR目黒駅。小学校のころからよく遊びに行った有栖川宮記念公園。実家というより大学、大学院時代の最寄駅、地下鉄日比谷線広尾駅。裏寂びれた天井から水漏れする駅こそ、主人公たちの稀有で偶然の出会いの場となる。私の日常的な散歩区域である港区白金、しかも「白金のよみは『しろかね』である。」の解説付き。同じく明治学院大学裏にある白金台の都ホテル東京、今はシエラトン都ホテル東京と名を変えたが、これだけ2ヶ月以内のわが生息区域、それも表通りだけでなく、昔ながらの裏通りまで繰り返し登場するとなると、まるで小説の中で自分も徘徊できる。

最終章三一節は何度も読み直す大どんでん返しというか、「なにになこれ？」という衝撃の結末。これをネタばらししたら大ヒンシュクなのでやめざるを得ないが、まさにタイトルにふさわしい結末とだけ言っておこう。言葉はいらない、読むだけである。おそらくこの章の主人公の歳は、今の私と同じくらいなのではないだろうか。

またまた、駅中の本屋で手に取った絵画がらみの本で締めくくる。冒頭に挙げた印象派の巨匠クロード・モネにまつわる一冊。ジヴェルニーというタイトルに思わず手に

取った、原田マハの『ジヴェルニーの食卓』(集英社文庫)は、そのモネの生涯を巧みな筆で余すことなく伝える。

日本人の印象派好きの例にもれず、私もこのところ何度かフランスに行く機会あり、ルーブルはもとより、モネ終焉の地、ジヴェルニーのピンクハウスや睡蓮の池も訪れた。瀬戸内海直島の地中美術館に心酔していた私にとって、あの睡蓮の大作だけで構成されるオランジュリー美術館も桁違いの感動を与えてくれた。モネの次男、ミッシェル(かわいい幼子時代の彼の絵がある)が、残されていた遺作の多くを寄贈したマルモタン美術館はもう一度訪れたい場所である。

モネの日本好きはピンクハウスの一階に、所狭しと、並べられた真筆の浮世絵の数でも驚かされるが、彼の最初の妻カミーユ(日本の衣装を羽織った立ち姿の絵が有名だが)も忘れられない。貧しいモネ夫婦にとって、唯一といってよいパトロンであった、実業家オシユデの一夜にしての経済的没落。その妻アリスと子どもたちを引き取ったモネ夫妻の度量、病弱なカミーユの死。やがて最後の五〇年を暮したジヴェルニーでのアリスとの再婚。ドラマティックな人生は展開する。アリスとの再婚は、行方不明だったオシユデの再登場とその死によってはじめて実現するの

だが、今なら週刊ネタであろう。

さらにドラマは進行する。モネの長男ジャンとアリスの娘ブランシュとの結婚。やがて夫ジャンを亡くしたブランシュは迷いなく敬愛する義父モネの世話に生涯を費やす。このモネの八六年の生涯こそ最高の小説を読む気がする。創作と事実の狭間はわからないが、スキヤンダル仕立ての好奇心よりも、人間の善意と深い愛情の交流として、心温まる本がどれほど豊かであることか。

同じように、平積みされた文庫本(上下)の表紙に、ゴッホの二種類の自画像が載せられている本を手にした。『空白を満たしなさい』(講談社文庫)、作者、平野啓一郎は芥川作家にして、デビュー当時は、中島敦あるいは三島由紀夫の再来ともいわれた。この小説も、私の好きな『いま会いにゆきます』で著名な市川拓司と同じジャンルの「蘇りもの」で、泉鏡花を思わせる。まさに純文学の旗手である。かつて、氏の長編小説『決壊』(新潮社)を読んだとき、その筆力に強く圧倒されたことを思い出す。

「小説を書くといっただは五度、六度」

というどなたかの川柳は、小説家志望の凡人のつばやきを上手く詠んでいるが、かくいう私も、まさに平野啓一郎との出会いによって、決してこうしたつばやきさえ、恥ずか



ジヴェルニーのモネの睡蓮の池

しくて言わなくなった、いや言えなくなった気がする。  
 とところで、ゴッホの自画像のことであるが、彼が描いた  
 たくさんの自画像の中で、上巻は、ゴーギャンとの共同生  
 活に敗れ、失意の中で耳を切り落とした包帯姿の絵であり、  
 下巻は、麦わら帽子の自画像として知られるものである。  
 自殺か、他殺か、事故死かを蘇って追及する主人公の言葉  
 として、「殺そうとしたんじゃなくて、こつちの麦わら帽  
 子のゴッホたちは、包帯のゴッホを、消そうとしたんじや  
 ないでしょうか?・・・」それがこの表紙の絵の意味だっ  
 た。装丁にもこんなに凝るなんて、やるじゃないのと感服  
 した次第である。

【追記】

モネの作品の宝庫であるマルモッタン美術館のモネ展が  
 上野の東京美術館で開かれた。一五〇近くあるモネの收藏  
 品の九〇も一挙公開という展覧会の案内は、「ふらんすへ  
 行きたしと思へども ぶんすはあまりに遠し せめては新  
 しき背廣をきて きままなる旅にいでてみん」と呼んだ萩  
 原朔太郎ならば狂喜乱舞したことであろう。パリがそのま  
 ま上野に引越してきた観さえあった。期間中、絵の入れ  
 替えがあり、前半の目玉、印象派の名前の由来ともなった

「日の出」から、蒸気と油のにおいが漂う「サン・ラザール  
 駅」へ。やはり時代を超えた名画は迫力ありました。

たかが川柳 されど川柳 (平成二七年下半年)

七月

金を借り貸方責める哲人は

今やギリシヤはEUのお荷物。債務不履行も貸したほう  
 が悪いとばかりの緊縮財政反対の国民。ソクラテスやアリ  
 ストテレスはこの現状をどう見ますかな。

ロボットの友達できた不登校

家庭用ロボットの開発が著しい。それも家族としての会  
 話が楽しめるという。一体一八万円十維持費。不登校の子  
 どもにとっては友達になるのかなと一句。

のびしろと努力不足を言い訳し

サッカーの本田選手の言葉らしいが、「のびしろ」とい  
 う言葉に注目が集まっている。伸びる余地という解釈だが、  
 努力すれば伸びるわけだが、努力不足だと伸びるはずのも  
 の・・・

題詠「仕事」

退職後ヒマつぶすのが仕事です (銅メダル)

長年希求した有り余る暇をどう上手に使うのか。「定年  
 後、金のかからぬ趣味残り」なんていう句もあったが、そ  
 のこと自体が今は仕事。

何も無いそれは立派な自由業

定年などの無い職業を自由業というらしいが、定年後、  
 好きなことをして過ごすのはまさに自由、これも自由業。  
 ただし給料はもらえず出ていく一方、趣味は仕事じゃない  
 んですね。

在れば苦に辞せばそれも苦宮仕え

「いそがしい」「たいへんだ」それならやめちまえ。そ  
 の癖、定年で辞めてしまうと一気に物足りなさに襲われる。  
 それが宮仕え。永い間お疲れ様。終わりよければすべてよ  
 しとしたいもの。

八月

陽の当たる道でミミズは悶絶し (佳作)

夏になると歩道にミミズが這い出て死んでいる。陽の当  
 たるところに出ると失敗しやすいという教訓かもしれない。  
 一生土の中で身を潜めるのもいいとは言えないが。

**ぼくテレカ出番信じてじっと待つ**

今は昔、捨てるに捨てられず財布の中でじっと待つ。まるで時代遅れになった自分みたいな気がする。いつかお役にたつこともあるとおもいつつ。

**砂時計残りの量もあとわずか**

砂時計の砂が減っていく感じが自分の人生でも感じる。その減り方はなめらかで結構速い。

**題詠「山」**

**この恋の行方危うい尾根づたい (佳作)**

危険と幸せが裏腹。そのほうがスリリングで燃えるもの。それは尾根歩きと似ている。それでもやめられないのが恋と登山。

**尾根渡る風は癒しのマッサージ**

夏の山歩きは苦しい。そんな時尾根に出て涼風に出会うと地獄に仏というか、山歩きはいいなという思いにとらわれる。まさに癒しのマッサージなのです。

**山と丘ちがいの知らず生きてきた**

三五〇メートルあたりで区別するそう。歳とって新しいことを知ると感動する。そんなことも知らずに生きてきたのだが、まだまだ知らぬことがたくさんありそうだ。

九月

**海に墜つ夕陽に杯を傾ける**

夕陽はきれいですね。そんな中でビールを飲む。至福の時です。川柳じゃないかも。日記に書いておいてと言われそうだが、ハワイでの思い出を句に。

**家中の器具がささやく癒し声 (佳作)**

世の人工音声が満ち溢れる。ほとんどが女性の声。それもやさしく穏やかに語りかける。こんな話し方、大切にすね。

**修羅場あり見て見ぬ振りには老いの知恵**

人生山あり谷あり。思い出したいくない修羅場だつてないわけじゃない。「君子危うきに近寄らず」と「義を見てせざるは勇無きなり」の間での見て見ぬ振りはやっぱり老いの知恵かな。

**題詠「災い」**

**天災は人災も連れやってくる**

天災は忘れた頃にやってくる。しかもその時同伴するのが人災。天災は避けられないが人災は人々を苦しめやるせない。人間手余り賢い生き物じゃないと感じるのはこんな時。

**歳かさね妻は転じてお多福に**

**内閣は不良パーツの交換で**

組閣の度ごとに、傷のある人、評判の悪い人、順番待ちの役に立たない人を入れ替える。あの赤じゅうたんの階段での満面の笑みを見るにつけ、わが国の不幸を痛感します。まだまだ不良パーツが隠れている。

**題詠「スマホ」**

**パンドラの箱と知らずに買いました (金メダル)**

結局、ガラ携からスマホに買い換えました。「今」を詰め込んだようなツール。まさに「現代のパンドラの箱」、さて空けてしまった今、最後に残るのはどんな希望なのでしょう。

**無くて済む俺とスマホは義兄弟**

携帯を忘れた日、不便と想う一方、無ければ無いで平穏な一日が過ぎていく。家でも大切なのかそうでないのか日々存在意義が薄れていく。だとすれば俺もスマホもどこかに似ている「義兄弟」。

**便利とは使いこなして云えること**

便利だ便利だ、とはいうもののよくわからず長い列を作ってスマホショップに並ぶ。半日で電池切れ。あれもこれもOFFにしてみる。結局、使いこなしてなんかいません。そこで一句。

災い転じて福となすというが、サイはサイでも悪妻は百年の不作。なんて相手も言っているかも。中年になればその妻もふつから、オカメなんて言わずにお多福ならありがたいことです。

**あざなえる縄なら災を極細に**

禍福はあざなえる縄のごとし。確かにそうなんです。なら禍は少なく福は多くというのが庶民の願いなのではないんですかね。

一〇月

**もう一年冷凍保存ハルキ本**

今年のノーベル文学賞。村上春樹の受賞を心待ちにしていたのはハルキストの一人である私だけではなかったろう。賞味期限切れを心配しながら、来年まで冷凍保存することにします。

**ティピペイ牛と車の四つ相撲 (銅メダル)**

各国の思惑がぶつかり揉めに揉めました環太平洋パートナーシップ協定(TTP)もやっと大筋妥結。牛肉と車の関税も主要課題でした。まさにがっつり四つ。ところどころTTPは三文字?六文字?よくわからないのでカタカナ表記にしました。

十一月

**お前もかゼネコン各社杭打たれ**

ある特定の下請けの杭打ち会社の特定の人物に責任をかぶせる毎度の構造。しかし、どんどん広がり、それはゼネコン業界全体に蔓延る構造的隠ぺい体質であることが浮き彫りに。「ブルータス！お前もか」の言葉と共に、業界全体が杭を打たれることになった。

**山寺の屋根に落ち葉のお賽銭** (銅メダル)

十一月紅葉、そして落ち葉。「涸れ落ち葉これが札なら大儲け」みたいな感じを品よく屋根に降り注ぐお賽銭と表現してみました。

**マイナンバーきつと当たるとしまい込む**

サラ川を超えるサラ川を。よくわからないマイナンバー。大切だから失くさないようにと言われるが。「母しまう」だとやり過ぎかと思ひ、ただ「しまい込む」にしてみました。

**【題詠】「式」**

**金銀銅あんたら偉いよく耐えた**

銅婚式、銀婚式、金婚式を迎える夫婦。めでたいだけでなく、お互いのそこまで費やした忍耐力に敬服。

**人生の卒業式がお葬式** (佳作)

そのまんまですね。人生に数ある式の最期の式がお葬式。それを卒業式と試みてみたが卒業後どうなるのかそこに興味がありますね。

**先きを考え式は地味にする**

この式は結婚式。どのような展開を迎えるのか。今や三分の一は離婚するという。派手でバカバカしい結婚式などせずに、地味にやっておいた方がお後がよろしいようです。